

オスカー・ワイルドの童話の普遍性

宮本 裕司

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Universality of Fairy Tales by Oscar Wilde

MIYAMOTO Yuji

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Oscar Wilde (1854 - 1900), as the Irish aesthetic writer in the Victorian era, wrote religious fairy tales (*The Happy Prince and Other Tales*, 1888) and (*The House of Pomegranates*, 1891). It was the beginning of his writer's career.

The aim of this paper is to investigate the universal characteristic of Wilde's fairy tales. The way of my research is to compare Wilde's fairy tales with the works of Lewis Carroll (1832 - 1898) and those of James Barrie (1860 - 1937), because the latter two writers are still popular as well as Wilde's short fictions.

1. はじめに

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854 - 1900) はアイルランド出身の作家、劇作家、批評家である。皮肉で機知に富んだ唯美主義者であり、世紀末の寵児として当時の社交界で名声を得たが、わいせつ罪で投獄され、イギリス社会の批判にさらされた。作家として復帰することなく、失意のうちにパリで死去した。代表作として、『ドリアン・ 그레이の肖像』 (*The Picture of Dorian Gray*, 1891) や『サロメ』 (*Salomé*, 1893) のような、唯美主義色の濃い反道徳的な作品が知られている。

本稿は、ワイルドの童話とヴィクトリア時代¹を代表する童話を比較することで、ワイルドの童話を持つ普遍性を探求する試論である。ヴィクトリア時代は、「童話の黄金時代²」と呼ばれるほど、童話が書かれた時代であった。日本においては、ワイルド、クリスティーナ・ロセッティ (Christina Georgina Rossetti, 1830 - 1894)、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819 - 1900)、ケネス・グレサム (Kenneth Grahame,

1859 - 1932) などの童話が「妖精文庫シリーズ」として邦訳出版されている³。しかし、多くの童話が書かれたにもかかわらず、その多くが読まれなくなったと、三宅興子は以下のような注目すべき指摘をしている。

ヴィクトリア時代の児童文学の多くが、作品に濃厚に出ている教訓や価値観が古くなって、次の時代には読まれなくなったのに対して、トム⁴とダイヤモンド⁵を通して内在している人間らしく生きることへの願いが伝わってくる両作品は、時代を超えることができた。⁶

時代を超える作品として、チャールズ・キングスリー (Charles Kingsley, 1819 - 1875) の『水の子』 (*The*

³ 富山太佳夫、富山芳子編『妖精文庫 1～5』青土社、1999

⁴ トムはチャールズ・キングスリーの童話『水の子』の主人公

⁵ ダイヤモンドはジョージ・マクドナルドの童話『北風のうしろの国』の主人公

⁶ 三宅興子「児童文学に描かれた格差社会の考察」日本イギリス児童文学学会編『英語圏諸国の児童文学 II—テーマと課題』ミネルヴァ書房、2011、p.73

¹ ヴィクトリア女王が統治した 1837 年から 1901 年を指す。

² 富山太佳夫、富山芳子編『黄金の川の王さま—妖精文庫 2』青土社、1999、p.220

Water-Babies, 1863) とジョージ・マクドナルド (George MacDonald, 1824 - 1905) の『北風のうしろの国』 (*At the Back of the North Wind*, 1871) を三宅は挙げ、この二人の作者がいずれも聖職者であったという点に注目している。一方で、『北風のうしろの国』について、「一部の熱心な読者に細々と愛され続けてきたという類い⁷」と三宅は発言しており、時代を超える作品であったとしても、現代も多くの読者を獲得するのは難しいことが読み取れる。しかし、ルイス・キャロル (Lewis Carroll, 1832 - 1898) の『不思議の国のアリス』 (*Alice's Adventures in Wonderland*, 1865) やジェイムズ・バリ (James Barrie, 1860 - 1937) の『ピーター・パンとウェンディ⁸』 (*Peter and Wendy*, 1911)、ワイルドの童話は、映像や絵本にもなり、広く受容される普遍性を帯びている。

ワイルドの師であるラスキンの「黄金の川の王さま」 (*The King of the Golden River or The Black Brothers: A Legend of Stiria*, 1841) は、正しい者は美しく、悪い者は醜く、最後に罰せられるという勧善懲悪の単純な童話であるが、ワイルドの童話は複雑である。ワイルドの童話では、美しい者が善良とは限らず、善良な者が救済されるとは限らないという点で、伝統的な教訓性を覆している。そこで、単純ではないワイルドの童話と同じく、単純ではない『不思議の国のアリス』や『ピーター・パンとウェンディ』と比較し、ワイルドの童話がどのように普遍性を持つに至ったかを検証する。

2. 童話の定義

論を進めるにあたり、「童話」という言葉の定義をすることから始めたい。本稿では、『ブリタニカ国際大百科事典』の定義⁹を採用し、「童話」とは児童文学の一ジャンルであり、主として幼年者を対象とする文学であるとして論を進める。L. H. スミスは、

⁷ 三宅興子「北風のうしろの国」
<<http://www.hico.jp/sakuhinn/2ka/kitakaze.htm>>
(2016年10月7日閲覧)

⁸ 『ピーター・パンとウェンディ』は1911年出版のため、厳密にはヴィクトリア時代から外れるが、ヴィクトリア時代の潮流を組む作品として本稿で取りあげる。

⁹ 『ブリタニカ国際大百科事典小項目版 2015 DVD-ROM』ブリタニカ・ジャパン、2015

「子どものために書かれた本がすべて、かならずしも文学ではない」ということと、「こういうものが子どもの本だとおとなの考えることが、いつも子どもの考えと一致するものではない¹⁰」と発言している。従ってスミスの定義では、文学として価値のある作品であり、かつ「子どものための本」であることが重要であるということになる。また、「子どものため」という言葉にも注意が必要であり、「子どもの教育のため」という教訓性が重視される場合もあれば、「子どもを楽しませるため」という娯楽性が重視される場合もある。谷本誠剛の発言によれば、児童文学は伝統的にキリスト教の立場から道徳的模範を示し、キリスト教のメッセージを例証するための物語であることが多い¹¹。

子どもを対象とした作品を童話と称しているが、私見によれば、童話を次のように分類することができる。1. 子どもによかれと大人が考えた本、2. 大人のための本が子どもに読まれるようになった本、3. 作者が自分のために書いた本が童話という形式をとった本という、3つである。子どもは自ら本を選んで読むことは稀であり、大人が子どものために買い与えたり、読み聞かせたりすることが多い。従って、「子どもによかれと大人が考えた本」には、大人の価値観が反映されることになりがちである。たとえば、グリム童話やジェームス・ジェーンウェイ (James Janeway, 1636 - 1674) の『子どもたちへのおくりもの』 (*A Token to Children*, 1671) である。「大人のための本が子どもに読まれるようになった本」の例としては、マーク・トウェイン (Mark Twain, 1835 - 1910) の『ハuckleberry Finnの冒険』 (*Adventures of Huckleberry Finn*, 1885) やジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667 - 1745) の『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels*, 1726) がある。大人が大人のために書いた本が、いつしか子どもに好んで読まれるようになったというものである。「作者のための本」とは、作者が自己投影した作品が、童話という形態

¹⁰ スミス、L. H. (石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男訳) 『児童文学論』岩波書店、2008、p.10

¹¹ 谷本誠剛「児童文学とは何なのか」日本イギリス児童文学会編『英米児童文学ガイド』研究社出版、2001、p.6

をとったものであり、ワイルドの童話がこれに該当する。このことについては後述する。

3. ヴィクトリア朝における文化現象としての童話の様相

ヴィクトリア時代は、デンマークの童話作家アンデルセン (Hans Christian Andersen, 1805 - 1875) とほぼ同時代である。ワイルドの「幸福な王子」(‘The Happy Prince’, 1888) や「漁師とその魂」(‘The Fisherman and His Soul’, 1891) に、アンデルセンの「マッチ売りの少女」(‘Den lille Pige med Svovlstikkerne’, 1848) や「人魚姫」(‘Den lille Havfrue’, 1836) を連想させる登場人物が描かれていることから、この時代におけるアンデルセンの影響の大きさが伺える。

ワイルドが生きたヴィクトリア時代の童話は、スミスの言葉を借りれば、「ロマンスと笑いと想像の方向¹²」へと変わった時代である。この変化には、時代の子ども観が反映されている。ロマン主義の流れの中で、子どもは原罪を負ったものではなく、イノセント(無垢)なものとする思潮が生まれた¹³。ヴィクトリア時代の思潮はロマン主義への反発から自然主義、唯美主義へと変わっていったが、ワイルドの童話は宗教的な側面と唯美主義的な側面の二つを備えている。

ヴィクトリア時代に大きな影響を与えた人物として、ウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757 - 1827) とマシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822 - 1888) が挙げられる。ブレイクは『無垢と経験の歌』(Songs of Innocence and of Experience, 1794) を、アーノルドは『教養と無秩序』(Culture and Anarchy, 1869) を著した。ブレイクの「無垢と経験」というテーマはワイルドの童話に、アーノルドの「ヘレニズムとヘブライズムの相克」というテーマはワイルド文学全体に大きな影響を与えた。

ブレイクの『無垢と経験の歌』は『無垢の歌』と『経験の歌』の二編に分かれている。『無垢の歌』は子どもの無垢を連想させる描写が多く、『不思議の国

のアリス』や『ピーター・パンとウェンディ』へと続く系譜である。一方、『経験の歌』は庶民の苦しみや不吉さを連想させる描写が多く、チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812 - 1870) が描いたヴィクトリア時代の庶民の苦しさや世相批判へと続く系譜である。また、子どもが経験することを通じて無垢の喪失や墮落を描くことが、ヴィクトリア時代以降の童話に投影されるようにもなった。ブレイクの影響を考慮する際、「経験=無垢の喪失」と定義するならば、「無垢」と「経験」は三宅の問題提起する子ども観の変化にも関連する重要なテーマと考えられる。ワイルドの童話も「無垢と経験」というテーマを取り上げているが、子どもを単純に無垢な存在とせず、経験を無垢の喪失ともしなかった。このことについては後述する。

アーノルドが問題提起した「ヘレニズムとヘブライズムの相克」は、ヨーロッパ精神の二大源流であるヘレニズム(ギリシャ主義)とヘブライズム(ヘブライ主義)が、時代によっていずれかが前面に出ようと相克していることを指している。思索よりも勤勉な労働を強いられるヴィクトリア時代の風潮は、当時の世相がヘブライズムに接近したためであるとアーノルドは指摘した¹⁴。二重予定説の恐怖から、プロテスタントと資本主義が結びつき、市民に道徳的抑圧を強いらせることになった¹⁵。また、ヘブライズムへの反発と、ヘレニズムへの回帰から、世紀末思想としてデカダンスや芸術至上主義へと結びついていった。

ワイルドの童話の中に愛他精神とデカダンスという相反する思想が混在している原因が、無垢と経験にあると富士川義之は発言している。

自己愛的性分を多分に備え、自己顕示欲の強い、傲慢不遜な言行の持ち主だった彼の内面には、しかしながら、経験への恐れか、破滅への恐れが、言いかえれば無垢への、あるいは愛他

¹² スミス、L. H. (石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男訳) 『児童文学論』岩波書店、2008、p.10

¹³ 三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、1993、p.282

¹⁴ アーノルド、マシュー(多田英次訳)『教養と無秩序』岩波文庫、2015、pp.161-164

¹⁵ ウェーバー、マックス(大塚久雄訳)『プロテスタンティズムと資本主義の精神』岩波文庫、2015、pp.32-33

精神への執着が絶えず渦巻いていた。¹⁶

富士川の指摘は、ヴィクトリア時代の思潮から、ワイルドが多大な影響を受けていたことを示している。すなわち、「無垢と経験」というテーマと、デカダンス（ヘレニズム）と愛他精神（ヘブライズム）というテーマが結びついており、ワイルドが同時代の中でも、ブレイクとアーノルドから多大な影響を受けていることが読み取れる。

4. ワイルドの童話

4.1. 中心テーマ

ワイルドは二冊の童話集を書いた。『幸福な王子そのほか』(*The Happy Prince and Other Tales*, 1888)には、「幸福な王子」(‘The Happy Prince’, 1888)、「わがままな大男」(‘The Selfish Giant’, 1888)、「ナイチンゲールとばらの花」(‘The Nightingale and the Rose’, 1888)、「忠実な友達」(‘The Devoted Friend’, 1888)、「すばらしいロケット」(‘The Remarkable Rocket’, 1888)の4編が、『ざくろの家』(*The House of Pomegranates*, 1891)には、「若い王」(‘The Young King’, 1891)、「王女の誕生日」(‘The Birthday of the Infanta’, 1891)、「漁師とその魂」(‘The Fisherman and His Soul’, 1891)、「星の子」(‘The Star-Child’, 1891)の5編、前後併せて合計9編の童話が収録されている。

ワイルドの9編の童話のうち、主人公が死ぬ結末が8編、神による救済を描いたものが5編ある。宗教的なテーマを描いた作品が多いが、営利主義者に利用されて善人が死ぬ作品や、主人公の自己犠牲が誰にも理解されずに非業の死を遂げる作品がある。このように、童話といえども、複雑で残酷なテーマが描かれており、キリスト教の要素と、ヴィクトリア時代の世相批判という要素を備えている。

ワイルドの童話には、「無垢と経験といっそう高い無垢という愛の弁証法¹⁷」と西村孝次が名づけたテ

ーマが潜んでいる。たとえば、「幸福な王子」において、快楽主義者であった王子が死を経験して自己犠牲に目覚める。さらに庶民への施しと、つばめの死という悲しみを経験して、王子は神に天国へ導かれる。「若い王」においては、快楽主義者であった王が、自分のために庶民がどのような苦しみを味わっているのかを夢の中で知る。その経験を積んで回心した結果、王は神によって叙階される。このように、ワイルドの童話では経験した結果、死や悲しみがその人間をより無垢で純粋な存在へと変化するものが多い。最も顕著な例が「星の子」である。美しい外見を持ちながらも、無垢であるがゆえに無知な星の子が、美しくないという理由で母親を罵倒する。その罰として醜い外見へと変貌し、その贖いの苦行を強いられる。その苦行を経験することを通じて、星の子は内面の美しさの大切さを知り、神による赦しの秘跡を受ける。単純に「無垢」と「経験＝無垢の喪失」とできないことや、自己犠牲や自己処罰の結果として救済されるという複雑なテーマが潜んでいる。また、宗教的な内容を描いただけでなく、同性愛を連想させる描写や唯美主義的な描写、異教趣味の描写、ヴィクトリア時代の営利主義批判、プロテスタント批判の描写も多く、複数の技法や中心テーマを取入れている。ブレイクの「無垢と経験」やアーノルドの「ヘレニズムとヘブライズム」という思潮を取り入れた上で、対立する思想を共存・混在させているという点は、のちのワイルド文学にも受け継がれている。

4.2. ワイルド文学における童話の位置づけ

唯美主義者として自己演出してきたワイルドであったが、宗教色の強い童話は彼の作家人生で初めての試みであった。詩や批評、戯曲を書くことで作家活動を始めた彼にとって、童話は初の成功作品であり、師であるウォルター・ペイター(Walter Pater, 1839 - 1894)から称賛の書簡を送られ、当時の読者からも肯定的に受容された。日本国内・海外を問わず、現代においても「幸福な王子」と「わがままな大男」は特に人気があり、幾度となく異なる挿絵で絵本や単行本として出版され続けている。唯美主義者ワイルド像と反するため、彼の童話は先行研究がまだ少

¹⁶ 富士川義之「愛他精神とデカダンス」富士川義之、玉井暲、河内恵子編『オスカー・ワイルドの世界』開文社出版、2013、p.36

¹⁷ ワイルド、オスカー(西村孝次訳)『オスカー・ワイルド全集3』青土社、1988、p.448

ないが、近年の「モラリストとしてのワイルド¹⁸」という観点の先行研究などで、再評価されつつある。唯美主義者ワイルドが持つモラリストとしての側面、すなわち、神による救済や自己犠牲の美しさを描いた童話作家としての側面が見直されてきているからである。

『幸福な王子』についてワイルドは、「子どもだけではなく、子どものような心を持った 18 歳から 80 歳の大人のため¹⁹」と書簡で言及しており、対象読者を子どもだけとはしていない。複雑であるがゆえに、そのメッセージを理解できる大人のための本であるにとどまらず、作者であるワイルド自身のための本であると筆者は見ている。快樂主義者から回心して神に救済される幸福な王子、キリストを連想させる少年から憐憫を寄せられて死を迎えるわがままな大男、世間に理解されず死んでゆくナイチンゲールなどは、のちのワイルドの人生を予言していたかのような内容である。彼は投獄され全てを失った後、死に臨んで、ロバート・ロス (Robert Ross, 1869 - 1918) の取り計らいで、憐憫を寄せられながらカトリックに改宗した。ワイルドは若くして自分の人生を悟り、童話という表現方法を用いながらも、自分の人生を投影した作品を執筆した可能性がある。この点を考慮すれば、彼の童話は本稿 2 で分類した、「作者のための本」ととらえることができる。最初期の作品であるワイルドの童話では、『ドリアン・グレイの肖像』や『サロメ』といった代表作のような唯美主義よりも、神による救済を描くことで、彼の根底に潜む宗教意識を描いていたのである。幼少時にカトリックに惹かれ、死に臨んでカトリックに改宗したワイルドであったが、童話以外の作品は唯美主義色が濃い。2 冊の童話集以降、ワイルドが童話を書くことはなく、死後出版された書簡集『獄中記』(The Profundis, 1905) 以外はキリスト教色が前面に出ることがなかった。しかし、『サロメ』をはじめと

するワイルド文学にはキリスト教信仰が潜んでおり²⁰、唯美主義とキリスト教は作品ごとに濃淡を変えつつ、共存・相克していると筆者は考える。ブレイクの「無垢と経験」やアーノルドの「ヘレニズムとヘブライズム」という思潮を取り入れたという点で、ワイルドの童話はワイルド文学の原点であるといえる。

5. ルイス・キャロルの童話

ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』はヴィクトリア時代を代表する童話のひとつである。「子どもの次元で笑いに満ちたくたのしさ」の文学を創造したことによって、「エポックをなす作品²¹」と評価されるほど、斬新な内容であった。『不思議の国のアリス』は実在の少女アリス・リドルへの口頭での即興をもとに書かれたもので、ケンブリッジ大学の学生へ即興で語ったワイルドの「幸福な王子」と同様である。リドルのためだけに書いた『不思議の国のアリス』が、ジョン・バニヤン (John Bunyan, 1628 - 1688) やアンデルセンのような教訓性の強い童話と異なることを、キャロルが主張した可能性がある。たとえば、アリスが「ワタシヲノンデ (Drink Me)」と書かれた菓を飲む場面では、「これまでアリスが読んだことのあるすてきなお話しは、いろいろとひどい目にあってしまう²²」という理由で、アリスが慎重になるという描写がある。過去の童話をふまえ、その上でアリスが冒険しているということが読み取れる。リドルを楽しませるためだけに、教訓性という伝統的な童話の文法を覆したといえる。

『不思議の国のアリス』は、アリスが冒険した世界は夢であったという、いわゆる「夢落ち」である。夢を見てただけで、アリスは成長したわけでもなければ、心と体に変化したわけでもない。アリスが夢から覚めた後、アリスが寝ている間ずっと寄り添

¹⁸ Cohen, Philip K. *The Moral Vision of Oscar Wilde*. London: Associated University. 1978

Willoughby, Guy. *Art and Christhood - The aesthetics of Oscar Wilde*. 1993

¹⁹ Holland, Merlin & Hart-Davis, Rupert, ed. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Henry Holt and Company. 2000. p.388.

²⁰ 宮本裕司「オスカー・ワイルド文学に潜むキリスト教的描写」『キリスト教文学研究 33』日本キリスト教文学会、2016、p.60

²¹ 原昌「ファンタジーの源流—L. キャロル」高杉一郎編『英米児童文学』中教出版、1977、p.58

²² キャロル、ルイス (河合祥一郎訳)『不思議の国のアリス』角川文庫、2016、p.19

っていた姉もアリスと同じ夢を見る。姉は年長だけあってアリスより冷静で、目を覚ますとつまらない現実に戻ってしまうことを理解しながら、夢を見ている。「大人になってから、この無邪気ですてきな子どもの心をどんなふうにも持ち続けるのかしら²³」と姉がアリスの将来を想う場面で、この作品は終わる。これは無垢の喪失への恐怖と、「実在の少女リドルが大人になって欲しくない」という作者の願望の投影であると考えられる。『不思議の国のアリス』は、夢の世界の幻想的かつ荒唐無稽な出来事と、「大人になりたくない」という人間の普遍的欲求を備えている。このような点が、『不思議の国のアリス』が今も読み継がれる優れた児童文学である理由である。

6. ジェイムズ・バリーの童話

ジェイムズ・バリーの『ピーター・パンとウェンディ』は、大人を憎み、大人になりたくない少年ピーター・パンを主人公とした小説である。バリーは息子ジョージをモデルにして、ピーター・パンという人物を作り上げた²⁴。この作品は、ピーター・パンとウェンディがネバーランドで冒険するというファンタジーであるが、母を知らないピーターが大人になることを嫌い、ウェンディにも大人にならないことを強制するという、一種の屈折が作品の根底に潜んでいる。「ピーター・パン・シンドローム」という障害があるように、「大人になりたくない」という人間の普遍的な願望を、簡素な文章で描いたエンタテインメントである。

『ピーター・パンとウェンディ』は、ウェンディと弟たちがネバーランドで冒険し、現実世界に戻ってくるという、「行きて帰りし物語」である。その冒険を通じて、ウェンディは子どもであるにもかかわらず、ネバーランドで母親役をするという経験を。ウェンディはピーターの妻であるだけでなく、弟の母ですらあり、経験する（大人の役割を果たす）が、無垢のままであり続けて欲しいという作者の願望が投影されている。子どもについて、「陽気で無邪

気で情け知らず (gay and innocent and heartless)」であると作中で繰り返し言及されている。ピーターは、キャプテン・フックのことも、死んでしまった妖精ティンカーベルのこともすぐに忘れてしまい、無垢であるがゆえの非情さを象徴した存在である。また、物語冒頭でウェンディたちが両親の家を飛び出したことが、「子どもというのは、世界一非情な生き物のよう飛び出してしまいます²⁵」と描写されている。また、経験することと親離れすることを、作者は「非情 (heartless)」という表現を用いている。

『ピーター・パンとウェンディ』は、バリーによる戯曲『ピーター・パンすなわち、大人になりたがらない少年』(Peter Pan; or, the Boy Who Wouldn't Grow Up, 1904) が元になっている。原作となった戯曲には、小説版の最終章にある、現実世界に戻った後のウェンディとその子孫とピーターの交流が描かれていなかった。従って、小説として刊行する際に追加された最終章こそ、作者が最も主張したかったことである。最終章では、現実の世界に戻った弟たちは、「どこにでもいる普通の人間になりました」と描写されており、経験が無垢の喪失であることがより鮮明に書かれている。ウェンディは純粋さを保ってはいたが、空を飛ぶことはできなくなっており、代わりにウェンディの娘ジェーンがピーターと冒険し、その冒険はジェーンの娘マーガレットへと受け継がれていく。少女の持つ無垢は、三代にわたって受け継がれていく。「行きて帰りし物語」で伝統的に描かれてきた、子どもの精神的成長を描いたものではなく、無垢の喪失が最終章で描かれていることが読み取れる。

7. ワイルドとキャロル、バリーの比較

本章では、ワイルドの童話と、キャロルの童話、バリーの童話を比較し、類似点と相違点を検証する。

ワイルド、バリー、キャロルとも、身近な子どものために童話を書いた。ワイルドは3年前に生まれた長男シヴィルと、2年前に生まれた次男ヴィヴィアンへの読み聞かせとして、キャロルはリドルへの

²³ キャロル、ルイス (河合祥一郎訳) 『不思議の国のアリス』角川文庫、2016、p.173

²⁴ バリー、ジェムズ (大久保寛訳) 『ピーター・パンとウェンディ』新潮文庫、2015、p.319

²⁵ バリー、ジェムズ (大久保寛訳) 『ピーター・パンとウェンディ』新潮文庫、2015、p.198

即興で、バリーは息子ジョージをモデルにして書いている。キャロルとバリーは、無垢への憧れという普遍的なテーマを、特定の子どもを読者として想定し、簡潔な物語を仕立て上げた。しかし、ワイルドの童話は息子への読み聞かせにとどまらず、大人も子どもも対象読者としている。ワイルドの童話には「無垢と経験」、「ヘレニズム（唯美主義）とヘブライズム（キリスト教）」など、対立する複数の要素が共存・混在している。このように、あくまで「童話」という枠内で子どもの望む本を書いたキャロルやバリーと異なり、ヴィクトリア時代の様々な思潮を取り入れたのがワイルドの童話である。

「無垢と経験」というテーマは三者で共通しているが、描かれ方が異なっている。経験を通じて神に救済される出来事や高次の無垢を描いたワイルドに対して、キャロルとバリーは、「大人になりたくない」という無垢の喪失を忌避する願望を描いている。キャロルとバリーの願望は、大人も子どもも持っている普遍的なものであり、現代の価値観においても読者に訴求する力を持っている。ワイルドの童話は、子どもの無垢を讃えるよりも、神を讃えることや、世相批判を優先していると考えられる。それが端的に表われているのが、「ワイルドの童話は、子どもが主人公ではない」という点である。ワイルドの童話の中で、子どもが主人公である作品は「星の子」だけであり、結末も星の子の死で終わるといふ悲劇的なものである。ワイルドの童話においては、子どもの視点からの世相批判もなければ、子どもの無垢を称賛する描写もなく、むしろ大人の社会を直接的に批判する方をワイルドは選んだ。たとえば、「忠実な友達」では、「友情」という錦の御旗のもとに搾取する粉屋のヒューと、独りよがりな友情を信じて命を落とす庭師のハンスを通じて、営利主義者批判と、道徳という言葉に弱いヴィクトリア時代のスノビズムを、ワイルドは批判している。

また、伝統的な童話の技法であった「行きて帰りし物語」と「夢落ち」をキャロルとバリーが用いたのに対して、ワイルドはこのいずれの技法も用いていない。ワイルドは、ヴィクトリア時代を舞台に虚構的な要素を取り入れつつ、悲劇的な結末や道徳的抑圧を描くことで、当時の読者にとってリアリティ

のある物語を描いた。現実世界の非情さや、救済されずに善良なものが死ぬというサプライズ・エンディングを描いているのは、この三者の中で、ワイルドだけである。また、「ナイチンゲールとばらの花」では自己犠牲を理解しない若者と対照的に、死こそが芸術的完成であるというナイチンゲールの唯美主義が描かれている。ヴィクトリア時代の世相を批判しながらも、唯美主義や快楽主義といった世紀末の思潮を取り入れつつ、キリスト教色の濃い童話をワイルドは描いた。

このように、童話という枠組みの中で簡潔で完成されたエンタテインメントを描いたキャロルとバリーの持つ普遍性と、ワイルドの童話の持つ普遍性は異なるものである。「子どものための本」としてエンタテインメントに徹したキャロルとバリーと異なり、「子どものための本」であり、「大人のための本」でありかつ「作者のための本」をワイルドは書いた。

8. ワイルドの童話の普遍性

8.1. 児童文学としての普遍性

ワイルドの童話は、キャロルとバリーが描いた「無垢と経験」だけでなく、「ヘレニズムとヘブライズム」の共存・混在をも描いた複雑な作品である。こうした思想の振れ幅の大きさや、テーマと技法の複雑さが、ワイルド前とワイルド後で、児童文学の潮流に変化が起こらなかった理由であると筆者は考える。キャロルやバリーのようなエンタテインメントやナンセンスに徹した童話は、それらを模倣した後続の作品がのちに書かれている。しかし、ワイルドのように宗教やエンタテインメントと反する唯美主義や同性愛を童話で融合させるのは難しかったと考えられる。ワイルドの童話を翻案した作品は、有島武郎の「燕と王子」（1926）以外には未見である。バニヤンの『天路歷程』（*The Pilgrim's Progress*, 1678）をはじめ、宗教的なメッセージを帯びた童話は多く存在するが、宗教に加えて唯美主義とエロティックな描写が混在している童話は、ワイルドの童話以外、他に類を見ない。「幸福な王子」の王子とつばめの依存関係や、「忠実な友達」のハンスの盲目的な友情は同性愛を連想させるし、「すばらしいロケット」の注目を集めるために燃え尽きることを望むロケットは唯

美主義者を連想させる。『不思議の国のアリス』や『ピーター・パンとウェンディ』が後世に大きな影響を与えたのと異なり、ワイルドの童話に続くような作品は登場しなかった。

先行研究では、子どもに読ませたいという大人の意図が働くため、児童文学はその時代の風潮を色濃く反映したものであるとされている²⁶。ワイルドの童話は、世相批判や世紀末思想、唯美主義を童話に反映させたが、その思想は普遍的なものではなく、ヴィクトリア時代に特化したものが多い。本稿1で既述した、ヴィクトリア時代特有の教訓性や価値観を帯びた童話が風化してしまったという問題点に、ワイルドの童話は該当する。

しかし、作中で描かれる自己犠牲の美しさや、弱者への共感、人間のエゴの醜さ、大切な人を失う悲しみといった人間的な葛藤は普遍的である。このようなテーマは伝統的な童話から逸脱するが、現代においても陳腐化していない価値観であるといえよう。皮肉にも、時代の申し子であるワイルドらしい唯美主義や世相批判は陳腐化した、ワイルド像に反する道徳と、人間的葛藤と相克という普遍的なテーマが残ったのである。

8.2. キリスト教文学としての普遍性

ワイルドの童話は宗教的感動を伴う、「キリスト教文学」に該当する。兒玉實英は、宗教的感動を伴う作品を「キリスト教文学²⁷」と定義している。宗教的感動とは、「改心、新生、信徒の交わりと恋愛、別れ、隣人愛、祈り、啓示、迫害、罪の許し、などに伴う宗教的感情²⁸」に起因する感動のこと指す。

絵本として邦訳出版されているワイルドの童話は、「幸福な王子」と「わがままな大男」、「星の子」だけであるが、この三作に共通するのは、宗教的感動を伴うこと、簡潔な短編であるということ、主人公

の死という悲劇、神による救済というカタルシスである。「幸福な王子」や「わがままな大男」の結末は、読者に宗教的感動を与える。「幸福な王子」では、「町中でいちばん貴いものをふたつ持ってきなさい²⁹」という神の命令に対して、悲しみに張り裂けた王子の心臓と死んだつばめを天使は持って行く。神は王子とつばめの自己犠牲をよしとして、天国へ連れて行く。「わがままな大男」では、子どもたちへの憐憫の情が芽生えた大男は回心し、キリストを連想させる少年³⁰に導かれて天国へと旅立つ。この二作は、死が現実の苦しみからの解放や神による救済であることを描いている。また、「星の子」の結末は、赦しと叙階の秘跡を連想させるカトリック的なものであり³¹、ワイルドのカトリックへの憧れと読み取れる。

宗教的感動に関する象徴的な出来事として、ワイルドの次男ヴィヴィアンが以下のように注目すべき回想をしている。

長男シ ril はかつて、「わがままな大男」を読んでもらっている時、なぜ父が涙を浮かべているのか聞いたことがあった。すると父は、本当に美しいものはいつも自分に涙を流させるのだと答えた。³² (筆者訳)

ワイルドが神による救済を美しいものと考え、涙を流すほど自分の童話を愛していたことが、この文章から読み取れる。ワイルドの童話は息子たちのための童話でありつつ、キリスト教信仰を投影した、彼自身のための童話でもあったといえる。

9. 結論

ワイルドの童話は、「宗教的或いは敬神的題材を用いて、それを子どもに伝えるための創作物語である。

²⁶ 三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、1993、p.277

²⁷ 兒玉實英「キリスト教と文学のかかわり」安藤敏隆、吉海直人、杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社、2002、p.112

²⁸ 兒玉實英「キリスト教と文学のかかわり」安藤敏隆、吉海直人、杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社、2002、p.112

²⁹ ワイルド、オスカー（西村孝次訳）『幸福な王子』新潮文庫、1993、p.22

³⁰ 両手と両足に釘あとを持つ少年として描かれている。

³¹ プロテスタントの sacrament（聖礼典）は洗礼と聖餐のみであるのに対し、カトリックの sacrament（秘跡）は、洗礼、堅信、聖体、赦し、病者の塗油、叙階、結婚である。

³² Holland, Vyvyan, *Son of Oscar Wilde*, New York: Carol & Graf Publishers. 1954. pp.53-54

筆者は、このような宗教的感動を伴う童話を、「キリスト教児童文学」と定義する。『水の子』や『北風のうしろの国』も同じ要素を持つため、ヴィクトリア時代の「キリスト教児童文学」であるといえるが、ワイルドの童話と異なり、現代も広く読み継がれるには至らなかった³³。むしろ、キリスト教的要素や教訓性を排した代わりに、無垢の喪失の忌避という普遍的で複雑な願望を投影し、エンタテインメントに徹した『不思議の国のアリス』や『ピーター・パンとウェンディ』の方が広く読み継がれている。

『北風のうしろの国』は宗教的感動を伴うが、ワイルドの童話のような複雑さを持たなかった。ワイルドの童話が持つ複雑さは、1. 「子どものための本」と「大人のための本」と「作者のための本」の葛藤、2. 「芸術家ワイルド（唯美主義）」と「人間ワイルド（キリスト教）」の葛藤という要素が投影されているためである。この2つの葛藤は、「無垢と経験」と「ヘレニズムとヘブライズム」という極端な思想の間でワイルドが揺れ動いたためであると考えられる。このことこそ、ワイルドの童話が様々な解釈を読者に迫る理由のひとつである。ワイルドの童話は、芸術至上主義というヴィクトリア時代特有の風化してしまった要素以上に、神を賛美する宗教意識という普遍的要素が前面に出ている。そして、作者の葛藤したテーマが投影されているからこそ、キリスト教色の濃い普遍的な結末に至ったとき、読者にカタルシスを与えるのである。ワイルドの童話は、唯美主義をはじめとする種々のテーマを備えつつも、今なお読み継がれているすぐれた作品であるといえよう。

(Received: January 21, 2017)

(Issued in internet Edition: February 6, 2017)

³³ 邦訳出版されている『水の子』は偕成社版、岩波少年文庫版ともに絶版、『北風のうしろの国』は岩波少年文庫版を除いて絶版となっている。日本における読者数の少なさを示していると考えられる。ワイルドの「幸福な王子」や、『不思議の国のアリス』、『ピーター・パンとウェンディ』が数多く出版されているのと対照的である。